

隠岐地域をフィールドとした 「教育課題探究実習」の意義と実践

波 江 彰 彦 (教育学部)

要 旨

本稿では、2019年度に関西学院大学教育学部において新設された「教育課題探究実習」について、授業科目としての意義や、初年度の実習内容およびその成果と課題について報告する。本実習は「ハンズオン・ラーニング・プログラム」の一科目として提供され、課題探究・解決型の授業（PBL 科目）と位置づけられる。2019年度は教育魅力化等の取組を先駆的に行ってきた島根県隠岐地域を実習の対象地域とした。現地の高校生が取り組む PBL へのサポートや協働、中学生を対象とした授業実践や高校生とのディスカッション、フィールドワークを通じた教育課題や地域課題の探究などにより、教育者としての力を高め、教育や地域に関する課題の解決策を提案することをねらいとした。現地実習は5泊6日の日程で行われ、学校での授業実践や生徒との討論・交流、教育行政や地域課題に関する調査、隠岐ユネスコ世界ジオパークの体験などを行うことができた。初年度の実習の成果として教育者としての資質・能力の向上や幅広い視点から課題探究に取り組んだことなどが挙げられる。その一方、メンターやファシリテーターとしての能力を高めるためのプログラムを十分に実施できなかったことや、課題探究をいかにして課題解決策の提案や実践につなげていくか、などが今後の課題である。

1. はじめに

「教育課題探究実習」は、2019年度から新設された関西学院大学教育学部の開講科目である。本稿の目的は、この科目を新設するにあたり、担当教員として科目に込めた意義や初年度の実習内容およびその成果と課題について、速報的に報告することである。

まず、科目新設の経緯について述べておきたい。この「教育課題探究実習」は、2014年度文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援」事業（タイプB：グローバル化牽引型）に採択された関西学院大学の構想の中のひとつである「ダブルチャレンジ制度」と関連づけられる¹⁾。ダブルチャレンジ制度には3つのプログラムがあり、そのうちの「ハンズオン・ラーニング・プログラム」の教育学部独自科目として開講することになった。「ハンズオン・ラーニング・プログラム」とは、「キャンパスを出て、実社会を学ぶ」をキーコンセプトに、企業や地域、行政、NPO・NGO等と連携しながら課題解決・企画提案型プロジェクト、インターンシップ、フィールドワークを中心とした実践型の学習を行うことが想定されたプログラムである²⁾。

教育学部としてはすでに「実地教育研究（実習）」などをハンズオン・ラーニング・プログラ

ム科目として提供していたが、学部の性質上、「実地教育研究（実習）」の履修者のほとんどは幼児教育コース・初等教育コース所属の学生であり、教育科学コース所属の学生が履修できるハンズオン・ラーニング・プログラム科目の提供が必要であった。教育科学コースの特徴としては、主に中学校・高等学校の教員免許状を取得し学校教員を目指す学生がいる一方、教育に対する幅広い関心や授業・ゼミ等で学んだ専門的な知識を生かして企業等に就職する学生も多く輩出していることが挙げられる。

以上のような状況があり、また、準備期間がある程度限られた中で新科目の立ち上げを要請された。教育学部の教員として、また、人文地理学を専門とする研究者としてどのような科目をつくるべきか、あるいは、つくりたいのかを考えたとき、教員養成に資する内容にする一方で、地域でのフィールドワークを通じてより広い視点で「地域における教育」ととらえ、地域が抱える教育的課題について深く考察し、課題解決に向けた提案を行う、という構想が思い浮かんできた。こうした構想を端的に表す科目名として「教育課題探究実習」という名称を考案した。そして、実習の実施が可能なフィールドワーク先の選定も必要であり、①筆者が研究・業務等でたびたび訪問していること、②教育に関する先駆的な取組がみられる地域として全国的に注目されていること、の2点を理由として鳥根県隠岐地域を実習の対象地域として設定することにした。

隠岐地域に対象地域を絞り込んだ時点から、実習協力先の具体的な検討と打診を開始した。また、教育学部事務室と協力しながら新設科目開講について学部生らに周知を図り、2019年度開始直後に二度のガイダンスを開き、履修者を募集した。履修者が確定した4月下旬から現地実習直前の8月下旬まで計6回の事前学習を行った。そして、8月最終週に5泊6日の現地実習を実施した。その後、事後指導（実習後ミーティング）や本実習に関連するイベント（4章で後述）を経て、本稿作成時点（2019年10月）に至っている。

2019年度の「教育課題探究実習」で予定している内容はまだ完了していないが、2020年度においても本実習は開講予定であり、次年度に向けての準備を始めるべき時期に来ている。そのため本年度の振り返りと検証を行う必要がある。以下、2章では本年度の実習に込めたねらいについて述べ、3章では実習対象地域として選定した鳥根県隠岐地域の教育が抱える課題や教育魅力化の取組について説明する。4章では、本年度の実習内容について報告する。そして5章では、本年度の成果と課題について考察し、次年度に向けての改善点や展望を示す。

2. 「教育課題探究実習」のねらい

1章で述べたように、この「教育課題探究実習」はまったくの新設科目であり、履修対象の学生に早めに科目の新設とその概要を周知する必要があった。そこで、2018年12月下旬から、筆者の授業を履修している学生に概要説明を行った。科目立ち上げ当初のねらいを示すべく、概要説明の際配付した資料に記した「科目の目的」をそのまま転載する。

教育の魅力化事業に取り組んでいる鳥根県隠岐地域をフィールドとして、教育魅力化のさまざまな取組について学び、また、離島地域・縁辺地域が抱える教育課題について探究します。課題解決型学習（PBL）に取り組む現地高校生との協働を通じて、教育者としての力、特にメンターやファシリテーターとしての能力を高めることをねらいとしています。また、持続

可能な地域社会に向けて教育（者）は何ができるのかについて、チームワークによる PBL に取り組み、現地でのフィールドワークに基づいた課題解決策を現地の方々に提案することも目的とします。

本実習は PBL（Problem-Based Learning、または、Project-Based Learning）科目として位置づけている。その理由のひとつは本実習がハンズオン・ラーニング・プログラムとして開講されるものであり、そのプログラムのコンセプトを反映させているからである。経済産業省が提唱している「社会人基礎力」を備えた人材育成や、2016年8月28日の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」において提示されているアクティブ・ラーニング重視などの流れを受けて、日本の各大学では多様な PBL 科目が開講されるようになった³⁾。本実習もその大きな潮流の中にあるといえる。

もうひとつの理由は、本実習の構想段階から島根県立隠岐高等学校の生徒が取り組んでいる PBL と協働することを考えており、高校生による PBL と大学生による PBL の連携による相乗効果を期待したからである。3章で詳述するが、隠岐高校では1・2年生が「隠岐ジオパーク研究」という PBL に取り組んでおり、筆者は前任校の大阪大学在籍時から隠岐ジオパーク研究の成果発表会に参加する機会が何回もあった⁴⁾。そこでは高校生と大学生によるディスカッションも行われており、本実習にもそれを活かしたいと考えたのである。

高校生との協働は、本実習がねらいとする教育者としての資質・能力の向上ともつながっている。西岡ほか（2013）では、「教師に求められる力量」として5つの柱（A：教職に求められる教養、B：生徒理解と人間関係構築力、C：教科内容に関する知識・技能、D：教科等の授業づくりの力量、E：課題探究力）が挙げられている。このうち、本実習では主に「B：生徒理解と人間関係構築力」や「D：教科等の授業づくりの力量」に該当するメンターやファシリテーターとしての力を高めるようなプログラムを構想した。具体的には、本実習の履修学生が PBL に取り組む高校生にとってのメンターとなり、PBL がより良い方向に進むようにファシリテーターとしての役割を担うような実習内容を、高校側と協議しながら模索した。また、「E：課題探究力」も本実習と大いに関係のある能力といえよう。

さらには、上記の「科目の目的」には明記しなかったものの、人文地理学を専門とする科目担当者としては地域へのかかわりとフィールドワークを重視した。履修対象者は地理学を専門的に学ぶ学生ではないが、中学校社会科および高等学校地理歴史科の教員免許取得を目指す者としては、地理的素養である地域への視点やフィールドワークスキルを身につけることは重要である。また、そのこと以上に、持続可能な地域社会のための教育や教育者の役割・貢献について考えるとき、学校教育や教育行政といった比較的狭い範囲ではなく、より広い視野をもって「地域における教育」をとらえ、フィールドワークを通じて地域の実情や課題を把握し、そこから課題解決について考えてほしいという思いを反映させている。

3. 隠岐地域における教育課題と教育魅力化

2019年度の「教育課題探究実習」のフィールドとした島根県隠岐地域は、日本海側に位置する離島地域である(図1)。島前と島後の2地域に大きく分かれ、島前は海士町・西ノ島町・知夫村の3町村で構成されており、島後は隠岐の島町の1島1町体制である。2013年9月、隠岐地域は日本で8地域目となる「世界ジオパーク」(2015年11月からのユネスコ正式事業化以後は「ユネスコ世界ジオパーク」)に認定され⁵⁾、雄大な自然、独自の生態系、長い歴史をもつ人々の営みや文化が世界的にも注目されるようになった。

その一方で、離島・縁辺地域であるがゆえに、人口減少や高齢化は著しい。また、子供も年々減少しており、2015年国勢調査によれば、島前3町村の年少人口比率は9.2%、島後は11.6%となっている。こうした少子化の進行を受けて、隠岐の島町では町立小・中学校の統廃合について検討し、2010年度から小学校については11校から7校へ、中学校については6校から4校へと統廃合された。高等学校は島前(海士町)に1校、島後(隠岐の島町)に2校あるが、島内の中学卒業生のうち一定数は松江市や出雲市などに立地する島外の高校へと進学する。隠岐地域に大学や専門学校は存在しないため、進学を希望する高校生は卒業後に必ず島を出ることになる。

島前地域唯一の高校である島根県立隠岐島前高等学校は、2000年代以降急激な入学者数減少が

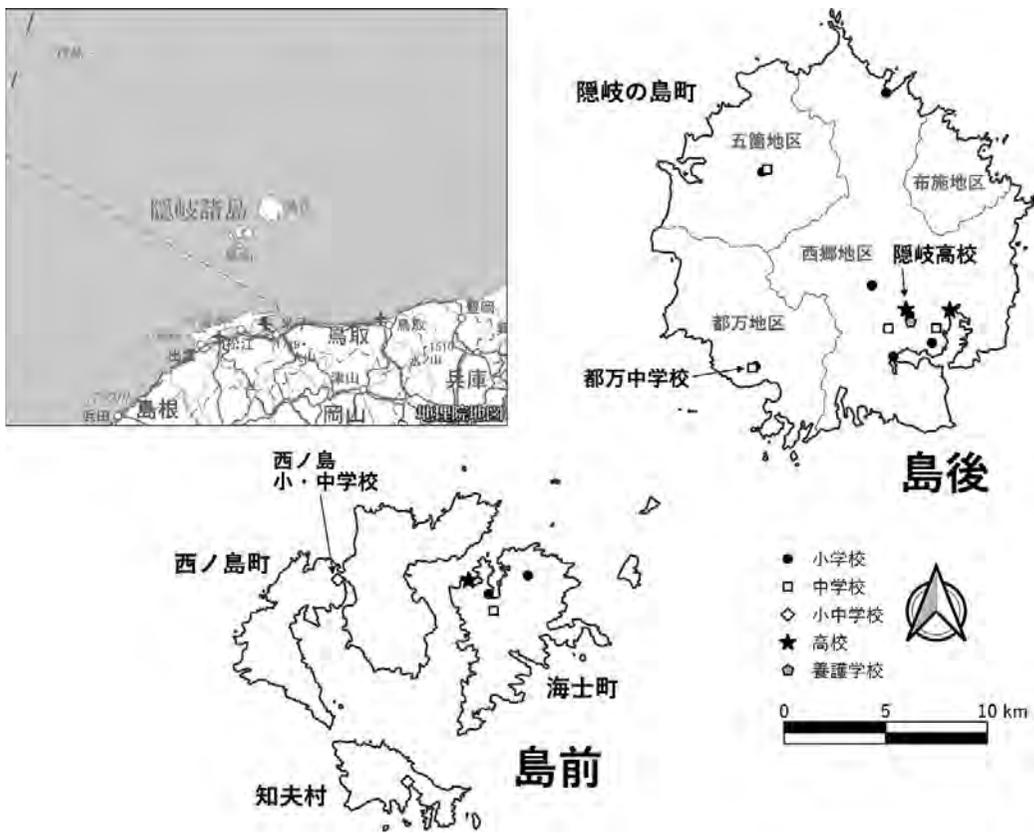


図1 隠岐地域と学校分布

「教育課題探究実習」で訪問した学校のみ学校名を示した。隠岐諸島広域図は地理院地図を利用した。

続いた。2008年度には入学者数が過去最少の28名となり、1学級化され教員数が大幅削減された。これ以上に入学者数が減少すれば隠岐島前高校は廃校（他の高校との統合）となり、島から高校がなくなればますます15歳人口の流出、ひいては一家離島が増加し、島の存続にもかかわると海士町は危機感を募らせた。そこで2008年3月、山内道雄海士町長（当時）を会長とし、島前3町村の行政・教育関係者や隠岐島前高校の校長・教頭・PTA会長らによって構成される「隠岐島前高校魅力化と永遠の発展の会」が高校の後援会を刷新する形で発足し、「島前高校魅力化プロジェクト」がスタートした⁶⁾。教育魅力化コーディネーター設置による高校・行政・地域の連携体制強化、島留学の推進や町費負担による寮建設、公設塾の開設による学習サポート、地域と協働するPBLなどさまざまな取組が全国的にも注目されるようになり、現在は島外、とりわけ東京・大阪等からの入学希望者も多い高校として知られている。

2011年度から島根県も「離島・中山間地域の高校魅力化・活性化事業」を開始し、2011年度は5校、2012年度に3校追加され8校が対象校となった（樋田・樋田 2018：pp.10-12）。隠岐高校は2012年度に追加された3校のうちの1校である。隠岐高校は教育魅力化事業の一環として、2012年度より「隠岐ジオパーク研究」を開始している。ジオパークに認定されている島内でフィールドワークを行い、隠岐の地質・生態系・歴史などについて学習するものであり（島根県立隠岐高等学校百年史編纂委員会 2015：p.296）、2015年度からは地域課題解決型の授業へと変更した（野々村 2017a）。生徒は1年の秋から2年の秋にかけて総合的な学習の時間（2019年度入学生からは総合的な探究の時間）の中で調査研究や成果発表に取り組む。設定された地区でフィールドワークを行って地域の課題を発見し、グループごとに課題解決策を考え、学校の内外に提案する（野々村 2017b）。2015/2016年度は「西郷港周辺の商店街活性化」および「隠岐の林業の現状と課題」をテーマとして、2016/2017年度は中村地区、2017/2018年度は五箇地区、2018/2019年度は布施地区をそれぞれ対象地域として隠岐ジオパーク研究が行われてきた⁷⁾。

4. 2019年度「教育課題探究実習」の概要と実習内容

2019年度は教育学部2・3年生を対象に履修者を募集し、8名が履修した。その内訳は、学年別では2年生が2名、3年生が6名、男女別では男性が5名、女性が3名であった。全員が教育学部所属の学生である。本実習は、4月から8月にかけて複数回実施した事前学習、隠岐地域での現地実習、事後指導（実習後ミーティング）、実習報告書作成の4つで構成される。本稿作成時点（2019年10月）では実習報告書はまだ完成していないため、以下では主に事前学習から事後指導までの内容について報告する。

4.1 事前学習

事前学習は、現地実習に向けた準備状況や履修学生の都合に合わせて実施し、結果的に計6回となった。各回の実施日時と内容は表1のとおりである。

事前学習は隠岐地域に関する理解を深めることから始め、とくに1) 現地実習の計画作成、2) 隠岐ジオパーク研究へのサポート、3) 中学校での授業実践案の作成に多くの時間を割いた。また、事前学習・準備の進め方としては、4) チームによるマルチタスクと情報共有を重視した。以下、1)～4) について述べる。

表1 事前学習の実施日時

回	実施日時	主な内容
第1回	4月24日(水) 13:30~15:00	顔合わせ、実習の概要説明
第2回	5月14日(火) 13:00~15:00	隠岐ジオパーク研究中間発表成果物の検討
第3回	6月8日(土) 9:00~12:00	現地実習計画(学校訪問・調査等)の検討
第4回	6月29日(土) 9:00~12:00	4チームによる同時並行作業
第5回	7月23日(火) 13:00~15:30	中学校での授業実践案や布施地区調査の検討
第6回	8月23日(金) 16:20~18:00	授業実践のリハーサル、実習前最終確認

1) 現地実習の計画作成

4月の第1回事前学習の時点では、隠岐の島町教育委員会への訪問と隠岐高校での隠岐ジオパーク研究最終中間発表会への参加のみが決まっており、現地実習計画の大半は履修学生のアイデアや希望を尊重しながら全員の協議によって決定していった。たとえば、現地実習2日目の布施地区での調査は、隠岐ジオパーク研究の内容について理解するには自分たちが研究対象地域である布施地区について知らなければならない、という学生からの意見を発端としている。また、学生の多くは学校訪問や授業実践、子供たちとの交流を希望しており、隠岐の島町教育委員会と西ノ島町教育委員会の協力を得て、2校への訪問が実現することになった。筆者による布施地区と西ノ島町の現地視察が7月下旬になったこともあって計画作成は遅れたが、8月上旬には詳細な現地実習・行動計画を確定することができた(表2)。

2) 隠岐ジオパーク研究へのサポート

隠岐高校では2019年3月14日(木)に第1回、6月13日(木)に第2回の隠岐ジオパーク研究中間発表会を実施した。その動画と発表会で使用したパワーポイントの提供を受け、本実習では発表内容に対するコメントやアドバイスを作成し、高校側に送るという取組を行った。2章でも述べたように、こうした取組を通じて、研究に取り組む高校生にとってのメンターとなり、研究をよ

表2 現地実習計画(概略版)

実習日	実習計画
第1日目(8/26)	隠岐の島町へ移動(空路)、隠岐の島町教育委員会訪問
第2日目(8/27)	布施地区調査(布施支所での聞き取り、フィールドワーク)
第3日目(8/28)	隠岐ジオパーク研究最終中間発表会への参加、シーカヤック体験および隠岐ユネスコ世界ジオパークに関する意見交換会
第4日目(8/29)	西ノ島町へ移動(フェリー)、西ノ島中学校での授業実践・交流、西ノ島町教育魅力化事業に関する調査、コミュニティ図書館「いかあ屋」見学、隠岐の島町へ移動(フェリー)
第5日目(8/30)	都万中学校での授業実践・交流、島根県教育庁隠岐教育事務所での聞き取り、隠岐自然館見学
第6日目(8/31)	自由行動、伊丹空港へ移動(空路)、解散

り良い方向に導くファシリテーターとしての力をつけることを目的とした。隠岐ジオパーク研究は12チームに分かれて行われていたため、学生8名を2人1組の4グループに分け、1グループが3チーム分の発表を分担した。動画とパワーポイントのデータを共有し、学生はそれを見ながら発表の内容・方法・話し方などについて検討し、高校生に対するコメントやアドバイスを作成した。筆者がそれを取りまとめ、隠岐ジオパーク研究を統括する教員へ送信した。コメントやアドバイスは隠岐ジオパーク研究の指導にかかわっている教員間で共有してもらったが、それをどのように活用するかについては高校側の判断と裁量に委ねた。

3) 中学校での授業実践案の作成

教育科学コース所属の学生は、他の2コース（幼児教育コース・初等教育コース）所属の学生と比べれば学校での教育経験を積む機会が相対的に少ない。教員を目指す学生が教育者としての能力を高めるためには学校での授業実践や児童生徒との交流の機会をつくることが重要と考え、学生の多くもそのことを望んでいた。隠岐の島町教育委員会と西ノ島町教育委員会に打診した結果、隠岐の島町立都万中学校と西ノ島町立西ノ島中学校を訪問する機会を得た。

都万中学校については、1年生と3年生を対象にそれぞれ1コマ（50分間）ずつ授業を行うことになり、授業内容・計画の検討と授業実践案の作成を進めた。3年生向けの授業では大学生を対象としたアンケート調査の結果を取り入れるべく、インターネット（Google フォームおよびSNS）を利用したアンケートを実施し、217名から回答を得た。また、授業で使用するパワーポイントを分担して作成し、現地実習直前の第6回事前学習においてリハーサルを行い、パワーポイントの内容・形式、時間配分、中学生に向けた話し方などについて相互チェックと改善を行った。

他方、西ノ島中学校については、学校側から大まかな授業計画と学生への要望が届けられ、それに合わせて授業準備を行うことになった。3校時は1年生と2年生の両方に対して授業を行うために、学生を4人ずつの2グループに分けた。4校時は3年生向けの授業である。プレゼンボード（画用紙などに自由にフレーズを記入したもの）を用いて授業を実施してほしいという要望を受け、パワーポイントは作成せず、プレゼンボードの内容や効果的な使い方、授業内の時間配分や役割分担などを検討し、授業実践案やプレゼンボードの作成を進めた。

4) チームによるマルチタスクと情報共有

現地実習計画が具体化してきた第4回事前学習から学生を2人1組、4つのチームに分け（表3）、実習準備の同時並行作業を図った。各チームのメンバーはチームに与えられた役割分担に責任をもって取り組むが、チーム内で完結するのではなく、チーム外の学生も巻き込みながら、実習準備の進捗状況や解決すべき課題を全員で共有することを求めた。そうすることによって、履修学生全員が本実習の全体像を把握し、実習における各活動への関与度を高めることができると考えたからである。

筆者も含めたメンバー間の連絡や情報共有には、学生にとっての使いやすさを重視してLINEを活用した。また、動画・パワーポイントなどの大容量データの共有や学生からの課題提出、チーム内およびチーム間の共同作業にはGoogleドライブに作成した共有フォルダを活用した。

表3 4つの班と各班の役割

班	班の役割
行政班	隠岐の島町教育委員会や島根県教育庁隠岐教育事務所に対する調査内容等の検討、両機関との連絡・調整
学校/計画作成班	都万中学校での授業実践案の検討・準備、学校との連絡・調整、実習全体の行動計画（実習のしおり）の作成
布施班	隠岐の島町役場布施支所に対する調査内容等の検討と連絡・調整、布施地区での調査内容の検討
西ノ島町班	西ノ島中学校での授業実践案の検討・準備、西ノ島町教育委員会との連絡・調整

4.2 現地実習

2019年8月26日(月)から31日(土)までの6日間、隠岐の島町および西ノ島町において現地実習を実施した。隠岐の島町へのアクセスは空路(伊丹空港—隠岐空港間を発着する便)を利用し、西ノ島町へはフェリーを利用して移動した。現地では可能な限り公共交通機関(バス・タクシー)と徒歩で移動したが、一部は訪問先の方々の厚意により送迎等の便宜を図っていただいた。宿泊先は隠岐の島町西郷港近くの2か所を確保し、学生は男女に分かれて分宿した。

おおむね表2に示した計画に沿って実習を実施することができたが、2日目および3日目は悪天候により、予定の一部を変更した。実習内容は、1) 教育行政に関する聞き取り調査、2) 布施地区での調査、3) 隠岐ジオパーク研究最終中間発表会への参加、4) 中学校での授業実践、5) 西ノ島町の教育魅力化に関する調査、6) 隠岐ユネスコ世界ジオパークの体験、に大別できる。以下、時系列ではなくこの区分に沿ってそれぞれの内容について記述する。

1) 教育行政に関する調査

実習初日(26日)に隠岐の島町教育委員会を訪問し、少人数教育の利点と課題、学校統廃合の経緯と現状、ふるさと教育、学校での働き方改革、教育現場でのICT活用などについて質疑応答や意見交換を行った。町の管轄である小・中学校が話題の中心であったが、県立である隠岐高校と隠岐水産高校の魅力化事業にも町は関与しており、高校魅力化に対する町の立場としての考えや取組について知る機会となった。

聞き取り調査の終了後、教育委員会事務局が置かれている建物内を見学した。この建物は2006年度末をもって閉校した旧今津小学校である。1999年に建て替えられてから10年も経たずに閉校となった校舎であり、現在でも十分使用可能である。2020年度中に教育委員会は隠岐の島町役場新庁舎への移転が予定されており、移転後は文化財等の展示施設としての利用が計画されている。

実習5日目(30日)には島根県教育庁隠岐教育事務所を訪問した。県の出先機関として隠岐郡全域を所管する機関であり、県全体や島前地域の動向もふまえながら、隠岐の島町における教育の現状と課題について質疑応答や意見交換を行った。学生はこの訪問までに隠岐ジオパーク研究最終中間発表会や中学校での授業実践などを経験してきており、そうした経験と関連づけながら、教員経験も長い学校教育主事・社会教育主事の方々とのディスカッションを行うことができた。



図2 布施支所での聞き取り調査



図3 隠岐ジオパーク研究ディスカッションの振り返り

2) 布施地区での調査

実習2日目(27日)は布施地区での調査を実施した。4.1でも述べたように、隠岐ジオパーク研究の研究対象地域である布施地区において聞き取り調査やフィールドワークを行って布施地区に関する知識と理解を深め、翌日(28日)に参加する隠岐ジオパーク研究最終中間発表会に活かすことを目的としたものである。

隠岐の島町役場布施支所では、布施小学校・布施中学校廃校の経緯やその後の教育環境、布施地区内の地域性・産業・地域課題、地域活性化の取組、隠岐ジオパーク研究を通じた高校生と地域との連携などについて聞き取り調査を行った(図2)。また、東京から移住しSNS等で布施地区に関する情報を積極的に発信している地域おこし協力隊のI氏からは、Iターン者からみた布施地区や隠岐の魅力と課題について話を伺った。

布施地区調査のもうひとつの目的はフィールドワークであったが、当日は終日悪天候で徒歩での移動には困難を伴う状況だったため、布施支所の厚意により、支所長および職員の方々に布施地区内を案内していただくことになった。廃校となり現在は布施公民館として使用されている旧布施小・中学校を見学し、また、隠岐ユネスコ世界ジオパークのジオサイトである乳房杉やトカゲ岩展望台、大山神社を巡った。移動中を通じて目にする整然としたスギ林も含め、布施地区の地域資源について体感しながら学ぶ機会となった。

3) 隠岐ジオパーク研究最終中間発表会への参加

実習3日目(28日)の午前中に、隠岐高校において隠岐ジオパーク研究最終中間発表会が開催された。10月の関西研修旅行において行う大学・企業等での成果発表会に向けての最終中間発表という位置づけである。当日は、住民、役場職員、隠岐ユネスコ世界ジオパークの関係者、大学教員、大学生など、隠岐の島町内外から多くの参加者がみられた。

12チームの発表は3会場同時に進行し、1チームの発表ごとに質疑応答の時間が設けられた。また、参加者には付箋が配られ、付箋に発表への感想・意見・アドバイスなどを記入して各チームにフィードバックするという形式がとられた。

全チームの発表終了後にディスカッションの時間も設けられた。各チームに発表会の参加者が加わり、生徒たちとともに発表の振り返りや改善点の検討などを行うというものである。学生は事前学習において担当していたチームに1名ずつ入り(12チーム中8チームに参加)、自らの意



図4 西ノ島中学校での授業実践



図5 都万中学校での授業実践

見を述べるのみならず、議論の活性化も図った。ディスカッション終了後、短い時間ではあったが、今回の隠岐ジオパーク研究を統括するY教諭と発表会およびディスカッション全体について意見交換を行うこともできた(図3)。

4) 中学校での授業実践

実習4日目(29日)は隠岐の島町から西ノ島町へと移動し、西ノ島中学校を訪問した。3校時(10:45~11:35)は、学生は4人ずつに分かれ、1年生と2年生を対象に授業を行った。1年生は12名、2年生は11名である。授業実践案に沿って、授業冒頭のアイスブレイク(2年生のみ)、プレゼンボードを用いたメッセージの発信や生徒たちとの交流(図4)、授業の振り返りとコメントシートの記入、という順に授業を展開した。4校時(11:45~12:35)は8名全員で3年生15名を対象に同様の授業を実施した。4校時終了後は、1~3年生クラスに分かれて生徒たちとともに給食を食べる機会も得た。昼休みも体育館や教室において生徒たちとの交流を深めた。

実習5日目は都万中学校を訪問し、1年生と3年生を対象に授業を行った。3校時(10:40~11:30)は1年生10名(ただし当日は1名欠席)が対象である。事前学習において授業計画を検討し、1年生に対しては授業前半の20分間を使ってアイスブレイクを兼ねた座談会を行い、授業後半はプレゼンテーション形式で「地元紹介」を行うこととし、その授業実践案に沿って授業を展開した。「地元紹介」では、履修学生のうち4名の出身地である静岡・大阪・京都・奈良を紹介するパワーポイントを作成し、それぞれの地域の魅力や課題を生徒たちに伝えた。この「地元紹介」のねらいは2つあり、1つは翌年度に実施する関西での修学旅行の参考にってもらうこと、もう1つはふるさと教育の一環として、学生が行う出身地への思い入れが伝わるようなプレゼンテーションを通じて郷土愛やアイデンティティについて考えるきっかけをつくるというものである。

4校時(11:40~12:30)は3年生12名を対象とした授業を実施した。授業実践案では1年生向けと同様にアイスブレイクを兼ねた座談会の後にプレゼンテーションを行う予定であったが、前日の西ノ島中学校や直前に1年生クラスで実施した授業での反省点をふまえ、3年生クラス担任の了承を得て座談会とプレゼンテーションの順番を入れ替えることにした。3年生クラスでは「大学紹介」というプレゼンテーションを行った(図5)。大学が存在しない島で生まれ育った生

徒たちにとっては、大学は身近に感じられるものではなく、訪問経験もほとんどない。そのような生徒たちにまずは大学や大学生の生活について知ってもらい、自らの進路を考えるきっかけをつくるのがこのプレゼンテーションのねらいである。関西学院大学の各種データや大学生217名から回答を得たアンケート結果などを用いて大学や大学生の実態について伝え、また、学生自身の学業面・部活動・アルバイトの様子について語った。プレゼンテーションの終了後、3グループに分かれての座談会へと移行した。学生の経験談も交えたプレゼンテーションを先に行うことによって質問しやすい雰囲気が形成され、生徒たちと学生との活発な交流がみられた。

5) 西ノ島町の教育魅力化に関する調査

実習4日目の午後は、2018年7月に開館した西ノ島町コミュニティ図書館「いかあ屋」を訪問した。まずは学習・交流室において、西ノ島町教育魅力化コーディネーターのK氏より同町の教育魅力化事業の概要やその取組のひとつである「西ノ島しまっこ留学」、学習支援を目的とした町営塾などについて説明を受けた。

その後、図書館内を見学した。図書館の愛称である「いかあ屋」は「行こうよ」という意味の西ノ島弁であり、図書館としての機能のみならず、町民や旅行者などさまざまな人々が集い、コミュニケーションやコミュニティ活動を促進するための多くの工夫がみられる空間である。社会教育施設や子育ての場として町民から好評を得ている図書館をじっくり体験する機会となった。

6) 隠岐ユネスコ世界ジオパークの体験

実習2日目の午後に布施地区における隠岐ユネスコ世界ジオパークのジオサイトを巡ったことはすでに述べたが、翌3日目も断続的に雨が降る状況であった。当初の計画では、都万地区の小津久海岸からシーカヤック洞窟ツアーを行い、ユネスコ世界ジオパークに認定された自然を体感するほか、島の観光資源・環境問題・環境教育について考えるという予定であったが、悪天候のため都万地区におけるジオサイトツアーに切り替えた。ガイドのS氏の説明を受けながら、屋那の船小屋、小津久海岸、壇鏡の滝、那久岬などを巡った。その後、隠岐の島町海洋スポーツセンターの施設において、S氏のほか2名も加わって、島の生活、島への移住、環境問題、環境教育などのテーマで意見交換を行った。

実習4日目の西ノ島町では、西ノ島中学校訪問の後、図書館に行くまでの間に、隠岐ユネスコ世界ジオパークの代表的なジオサイトのひとつである国賀海岸や摩天崖を訪れることができた。また、実習5日目の夕方には、隠岐ユネスコ世界ジオパークの展示施設である隠岐自然館の見学も行った。

4.3 事後指導（実習後ミーティング）と隠岐ジオパーク研究成果発表会

2019年9月21日(土)に事後指導（実習後ミーティング）を実施した。ミーティングのテーマは、主に①実習報告書の作成と②隠岐ジオパーク研究成果発表会についての2点であった。

①の実習報告書は、「Ⅰ 実習日誌」、「Ⅱ 隠岐地域が抱える課題と課題解決に向けた提案」、「Ⅲ 実習を終えて」の3部構成で作成することを求めた。本稿は実習報告書の提出期限前に作成しており、学生が提出した実習報告書の内容について言及することはできない。なお、各学生の実習報告書を取りまとめて「2019年度教育課題探究実習報告書」とし、現地実習においてお世話になった方々に配布する予定である。

②の隠岐ジオパーク研究成果発表会は、本実習とは直接的には関係しないため、本稿ではごく簡潔な記述にとどめる。2019年10月15日(火)に関西学院大学西宮聖和キャンパスを会場として隠岐ジオパーク研究成果発表会が開催され、隠岐高校2年の4チーム22名が研究成果の発表を行った。本実習の履修学生はボランティアとして発表会の準備・運営に携わった。また、学生は実習の成果を報告するポスターを作成し、発表会会場において展示した。

5. 成果と課題

以上、2019年度の「教育課題探究実習」の実施内容についてみてきたが、本章では現地実習を終えたところまでの成果と課題について整理し、本稿のむすびに代えたい。

1) 学校教育とのかかわりや経験

本実習では、事前学習の段階から隠岐高校の隠岐ジオパーク研究にかかわり、現地では発表会に参加して生徒たちとディスカッションを行った。また、西ノ島中学校および都万中学校において授業を実践し、中学生らとの交流を深めた。これらの活動はいずれも学校側から好評価を得た。一連の実習活動を通じて、学生は「生徒理解と人間関係構築力」や「教科等の授業づくりの力量」を高めることができたと考える。

しかしながら、本実習の当初のねらいのひとつであった、メンターやファシリテーターとしての力を高めるという点についてはやり方を再考する必要がある。隠岐高校の高校生とスカイプ等を用いて定期的にコミュニケーションをとることを考えていたが、スケジュール調整や手続きの問題などクリアすべき課題が多く、実現できなかった。地理的な隔たりも大きく、結果的に高校生と大学生との顔合わせは隠岐ジオパーク研究最終中間発表会まで待たなければならなかった。隠岐ジオパーク研究の中間成果物に対して学生が作成したコメントやアドバイスは、筆者(大学教員)と高校教員の二者を経由して間接的に生徒たちに届けることになったが、生徒たちにとってコメントやアドバイスがどのくらい参考になったのかについては今後検証する必要がある。

また、今回の実習によって得た授業実践やディスカッションなどの経験は、あくまでも単発的なものであることに留意する必要がある。今回のようなかかわりを継続的なものにするにはどうすればよいか、具体的な方策を考えなければならない。

2) 課題探究・課題解決

今回の実習では、中学校・高校での教育活動だけではなく、教育行政や地域課題に関する聞き取り調査、教育魅力化事業の取組や教育魅力化コーディネーターという仕事に関する学び、隠岐ユネスコ世界ジオパークの体験など、さまざまな知見と経験を得た。履修学生の中には、本実習が今後のキャリアについて考え直すきっかけになったと話す者もあり、ふだん生活する大都市圏内とはまったく異なる環境の中で「教育」についてより広い視点からとらえる機会になったといえる。

しかし、実習報告書が提出されていない段階での判断は控えるべきではあるが、本実習はまだ課題解決策の提案までは到達できていない。現地実習への参加や報告書の提出をもって課題探究を終わりにするのではなく、隠岐地域で得た知見や経験からより本質的な課題を見出し、自らが生活する地域や日本全体が抱える課題と関連づけながら、今後も課題の探究を継続し、それを課題解決の実践にまでつなげていくことが期待される。

3) 教育課題探究のアプローチの再検討

新設科目として「教育課題探究実習」を立ち上げるにあたり、筆者は「教育課題」を学校教育の現場の中で起きている問題や教育制度上の問題などに限定せず、「地域における教育」「地域の持続可能性と教育」という観点から、社会教育、環境教育、地域人材育成、SDGsなども視野に入れながら「教育課題」をとらえようとした。結果的に、2019年度の実習は地理学的アプローチの色が濃い内容になったと現時点では総括している。

担当教員の専門性が実習のプログラム内容に反映されるのは当然のことである一方で、学校でのいじめの問題や教員の働き方改革、ICT教育の推進に向けた技術的課題など、教育現場が直面している喫緊の課題と正面から向き合っていないという率直な思いも残る。教育学においてはもちろんのこと、教育学以外のさまざまな分野においても「教育課題」のとらえ方はさまざまで、その解決に向けたアプローチも当然異なる。今後も「教育課題探究実習」という科目名で授業(実習)を実施していくのであれば、「教育課題」に関する考え方やアプローチの違いを整理し、教育学部が提供する実習科目としてとくにどのような教育課題に取り組むべきなのかをより明確にしておく必要がある。そして、その課題解決に寄与しうる専門性を有した複数の教員や専門家が授業(実習)を共同で担当することにより、プログラムの幅が広がり、教育者の育成により大きな効果をもたらすことが期待される。

付記

「教育課題探究実習」の準備段階から現地実習まで、隠岐の島町教育委員会、隠岐の島町役場布施支所、隠岐高校、隠岐ジオパークツアーデスク、西ノ島町教育委員会、西ノ島中学校、西ノ島町コミュニティ図書館「いかあ屋」、都万中学校、島根県教育庁隠岐教育事務所、隠岐自然館の皆様(掲載は訪問順)、隠岐の島町役場各課の皆様、そのほか隠岐地域の多くの方々大変お世話になりました。また、教育学部の教職員の皆様にも多大なご理解・ご協力を賜りました。ここに記して、心よりお礼申し上げます。なお、本実習の遂行にあたっては、関西学院大学のSGU推進費と個人研究費を使用しました。

注

- 1) 関西学院大学「グローバル・アカデミック・ポート」構想の「概要・目的」を参照。
https://gap.kwansei.ac.jp/gap_009716.html (最終確認: 2019年10月17日)
- 2) 関西学院大学「『ダブルチャレンジ』プログラムガイド2019」を参照。
<https://gap.kwansei.ac.jp/attached/0000158640.pdf> (最終確認: 2019年10月17日) また、ハンズオン・ラーニング・プログラム科目の実践例としては木本(2018)がある。
- 3) 大学教育におけるPBLの実践等については多数の報告がある。本稿では山口(2017)や永田(2019)などを参考にした。
- 4) 科学研究費補助金・基盤研究(A)「中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活の為のマネジメント=モデルの構築」(2014~2018年度、課題番号: 26244051、研究代表者: 堤研二・大阪大学文学研究科教授)の研究プロジェクトの一環として、2014年度以降、大阪大学人文地理学教室では隠岐の島町研究調査を実施してきており、発表会への参加はその一環である。
- 5) ジオパークとは「大地の公園」を意味し、地球(ジオ)を学び、丸ごと楽しむことができる場所である。ユネスコ世界ジオパークはユネスコの定める基準に基づいて認定された高品質のジオパークであり、

2019年4月現在、日本には9地域がある。日本ジオパークネットワークの「ジオパークとは」のページを参照。

<https://geopark.jp/about/> (最終確認: 2019年10月17日)

- 6) 現在は「隠岐島前教育魅力化プロジェクト」の名を冠し、島前地域全体の教育魅力化の取組を進めている。島前地域の教育魅力化については、渡邊 (2014)、山内ほか (2015)、第3期隠岐島前教育魅力化構想策定委員会・隠岐島前教育魅力化プロジェクト (2019)などを参照。
- 7) 島根県立隠岐高等学校『実践集録』復刊第6号～復刊第8号 (2017～2019)に掲載されている「隠岐ジオパーク研究 実施報告」を参照した。

参考文献

- 木本浩一 (2018)「ハンズオンであること―「社会探究入門」をふりかえって―」,『関西学院大学高等教育研究』8号, pp.1-14.
- 島根県立隠岐高等学校百年史編纂委員会編 (2015)『隠岐高等学校百年史』島根県立隠岐高等学校創立百周年記念事業実行委員会.
- 第3期隠岐島前教育魅力化構想策定委員会・隠岐島前教育魅力化プロジェクト編 (2019)『意志ある未来のつくりかた―第3期隠岐島前教育魅力化構想―』隠岐島前高等学校の魅力化と永遠の発展の会.
- 永田祥子 (2019)「PBLにおける学生の主体的な学び―グローバル人材育成を目指した授業実践―」,『関西学院大学高等教育研究』10号, pp.47-54.
- 西岡加名恵・石井英真・川地亜弥子・北原琢也 (2013)『教職実践演習ワークブック―ポートフォリオで教師力アップ―』ミネルヴァ書房.
- 野々村卓 (2017a)「巻頭言」,『実践集録』(島根県立隠岐高等学校)復刊第6号.
- 野々村卓 (2017b)「『しまね留学』と『高校魅力化』で島全体を活性化」,『しま』248号, pp.38-43.
- 樋田大二郎・樋田有一郎 (2018)『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト―地域人材育成の教育社会学―』明石書店.
- 山内道雄・岩本悠・田中輝美 (2015)『未来を変えた島の学校―隠岐島前ふるさと再興への挑戦―』岩波書店.
- 山口泰史 (2017)「わが国における PBL 研究の動向―大学教育での実践を中心に―」,『日本地域政策研究』19号, pp.34-41.
- 渡邊杉菜 (2014)『スギナの島留学日記』岩波書店 (岩波ジュニア新書).